宇久 ～島で暮らす人

特集

のんびりと数時間、船に揺られて行く佐世保があります。宇久島は、観光パンフレットで見るような南の島に負けない、青い海と青い空が日常生活の中にある場所です。島中のあちこちには放牧された牛の姿があり、のんびりと草を食んだり、白鷺と仲良く佇んでいたり。そう、テレビでも時々見かけるあの風景です。空にはいろいろな種類の鳥が飛び交い、季節によっては、車で走っているとかわいらしいキジの親子も確認できます。ただ警戒心が強いようで、すぐに草むらに入ってしまい、あっと言う間に見えなくなってしまいますが…。

そんな自然豊かな美しい宇久島に暮らす人々は、素朴で照れ屋で愛嬌たっぷり。島の外から訪ねた旅人を温かい笑顔で迎えてくれ、道ですれ違うときは当たり前のように「こんにちは」と、声を掛けてくれます。レトロな町並みに建つ民家の玄関先は花で彩られ、どこも驚くほど手入れが行き届いています。

島という場所を表現するにあたり、「島時間」「スロー」という言葉をよく耳にしますが、流れる時間は島も本土も同じはず。島を特別な場所に変える理由は、本土で生活する人の日常にはない、周りから包み込むような大きな自然が生み出す造形と色彩、そして時計を見るのを忘れてしまいそうな、ゆったりとした島の人の気質によるものではないでしょうか。今回はそんな宇久島の魅力を、そこに暮らす人々の姿とともにご紹介します。

出会いたい人に、出会いたいとき、出会える場所。それが宇久島の最大の魅力かもしれません。

❶平安時代末期、平家盛公が上陸した地は「火焚崎(ひたきざき)」と呼ばれ、太陽が水平線に沈む極上の夕日スポット。❷神浦地区はレトロな町並みが見られ、江戸時代初期～昭和23年まで商人が名乗っていた屋号が残っている。現在も名字より屋号でお互いを呼び合うことが多い。❸平港近くにある「心花園(このかえん)」という花畑。地元のお母さんたちが手入れしていて心休まる光景。❹小浜地区にある「アコウの巨樹」は、市の天然記念物に指定されている。幹周りは最大16m。広がる枝の間から気根(きこん)が下がり、地面についたら根を張り育つ。

photo:対馬瀬灯台

宇久町DATA

- 面積 26.4㎢
- 人口 2,549人(男性:女性=1,099:1,450)
- 世帯数 1,475世帯　※2010年6月1日現在。
- アクセス　佐世保港(鯨瀬フェリー乗り場)➡宇久平港
  高速船約1時間55分
  フェリー約3時間15分(直行約2時間25分)
  ※問い合わせ➡九州商船　☎22-6161　http://www.kyusho.co.jp/

車でぐるっと1周すると約30分。観光しながらだと3時間くらいです。

早く行きたい人は高速船、のんびりしたい人・子ども連れならフェリーがおすすめですよ。

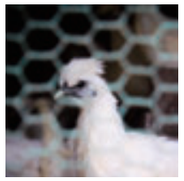
暮らす人

自然に逆らわず お日さまとともに

生まれも育ちも宇久、嫁いで宇久に来た、転勤で宇久に来た、宇久が好きで移り住んだ。宇久島で暮らす理由は人それぞれ違えど、ここに暮らす人々は、なぜか笑顔がとてもすてきで深く印象に残ります。老若男女問わず、働き者。だけど、どことなく皆ゆったりのんびりマイペース。自然に逆らわず、お日さまとともに生活するその姿の後ろには、自然の中だからこその苦労もあったはずなのに、それを感じさせない懐の深さがありました。

蛍のお父さんは今日も忙しい。

本飯良地区蛍保存会会長の宮﨑さん。自宅前の宮ノ首川にすむ蛍を守るため、掃除をしたり餌を与えたり。ボランティアの人たちと作った竹筒の灯籠は、ホタル祭りで使う。民家の植木にイルミネーションのように蛍が集まる年もあるそう。



ゆっくり暮らしIターン代表。

生来の釣り好きが高じて、とうとう福岡から移り住んでしまった山野さん。現在築70年の民家を借りて、烏骨鶏と蜂を飼い、畑を耕して生活中。山野さんの烏骨鶏の卵は黄身が濃く白身は甘みを感じる。炊きたてのごはんに溶いてのせれば、ぜいたくな卵ごはんのできあがり。遠くは関東まで、口コミで人気が広がっている。

宇久が大好き！ずっと住みたい。

夕方になるとウニを割って身を取り出す姿があちこちで見られた。小学生の太斗君と治貴君は、ご近所のお手伝いをしていた。将来の夢は、コックさんと漁師。治貴君が捕った魚を太斗君がさばき振る舞ってもらえる日が楽しみになる光景。

仲良し3人組の毎日の集会所がいつの間にか…

神浦地区の「すみれ会」はご近所さんの仲良し3人組。希望があれば体験型観光の受け入れをしていて、すり身の天ぷら作りを教えてくれる。材料のエソは漁師のだんな様が釣って来たものだから新鮮。魚をさばくところから始まり、油の中で見る見る膨らんでいくすり身を見ていると教える方も教えてもらう方も、自然と笑顔がこぼれる。

塩作りは熱さとの戦いだ。

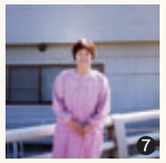
漁港近くの小さな小屋の中は、薪の火と海水からの水蒸気で過酷な状況。この小屋で作られる塩は甘みがあってまろやかと評判。「天ぷらとかおむすびによかよ」と坂本さんはにっこり笑った。

島全体で後継ぎを考える。

鳥山さんは、現在130頭の宇久牛を育てている。同時に、後継者育成にも力を入れていて、宇久の畜産農家を引っ張るリーダー的存在。現在、近くの畜産農家の後継ぎである西尾さんが、鳥山さんの下で研修中。ピアスやサングラス、鮮やかな色のつなぎを着た若者は、先輩の背中からしっかりと宇久における畜産のノウハウを学んでいた。ここで7～10カ月に成長した牛は、偶数月に行われる競り市に出され、遠くは新潟や山形などに売られる。

親子で船を出し刺し網漁。並んで作業する姿は仲むつまじく美しい。

75歳のおじいちゃんとおばあちゃんは19歳のときから40年以上、こうしていつも仲良く作業を行ってきた。今は次男の義孝さんと2隻の船を操り、夏場は協力して刺し網漁、冬場はそれぞれ一本釣りで魚を捕っている。この場にいなかった長男は魚屋を営んでいる。



❶ご近所連れ立ってのウニ漁。❷身を出す作業中、手に乗せてもらった採れたてのウニ。甘みがあって美味！❸磯遊びは晩ごはんのおかず探しも兼ねている。未来の宇久のお母さんたちはこうして磯に詳しくなっていくようだ。❹地元で「かたきゃ」と呼ばれている貝。歯ごたえが良く人気。❺旅館夕食の一例。海の幸たっぷりで、採れたてならではの食感が存分に味わえる。❻食堂の「鯨カレー」は本皮・胸肉・赤身の3種類が楽しめる。❼80年以上続く旅館のお母さん。ご家族4人で旅館を切り盛りしている。❽鯨カレーを作ってくれた食堂の嘉千代さん。

恵みの海

感謝の気持ち

鮑を採る海の男たちが平家盛公を助けたという宇久島では、いわゆる「あま」は「海士」と呼ばれています。家盛公が自分を助けた鮑採りの男たちに「士」という侍の位を与えたからです。誇り高き海士たちは鮑採りの道具「鮑かぎ」を刀のように腰に差して漁を行っていました。また江戸時代から捕鯨が盛んに行われていた関係で、現在も鯨の肉が手に入りやすく、あちこちで食べることができます。

海と共に歴史を刻んできた宇久島は、現在も海の恵みを生業としている家が多く、またそうでなくとも普段から磯に親しんでいます。毎年5月上旬～7月中旬までの大潮の3日間は「磯の口が開く」と言われるウニ漁の解禁日で、この期間は地元の人たちにとってイベントのように楽しみな時期。皆、幼いころから磯に行くのを当たり前として育ってきたので、夕方になるとそれぞれ自宅の前でウニの身を丁寧に取り出す作業を行います。世間話をしながらの微笑ましい光景です。

海を敬う宇久島の人々は、自分を取り巻く自然への感謝を忘れず、親しみながら生きています。人間もまた自然の一部。自然に感謝、人にも感謝、そういうやさしい気持ちがこの島の風土になっています。島の歴史と共に育まれてきた、こうした風土がある限り、宇久島の人々のすてきな笑顔は、これからも受け継がれていくことでしょう。

●観光についてのお問い合わせは宇久町観光案内所へ　☎0959-57-2455　http://www.ukujima.com
●タクシーでめぐる1泊2日のガイド付きツアーもあります。詳しくは西海パールシーリゾート（☎28-4187）へ

宇久島博士ここにあり。

6年前に中学校の先生を退職し、現在までボランティアの観光ガイドとして活躍している大岩さん。生まれも育ちも宇久島だけあってその知識は多方面にわたる。興味があることを聞き取って、その人に合ったガイドをしてくれるので一緒に歩くのがとても楽しい。

缶詰工場跡は今、お母さんの憩いの場所。

浜方ふれあい館前のベンチや館内では、地元のお母さんたちがおしゃべりを楽しんでいる姿が見られる。ここでは希望があれば鯨を使った「島料理作り」、地元産の天草を使った「トコロテン作り」などの体験型観光も行っていて、宇久島の家庭の味を教えてもらえる。

早く来ないと売り切れちゃうよ。

朝7時半、地元の生産者が採れたての野菜を運び込む「うきうき野菜市」。どれでも100円という安さも相まって、買いに来る人も7時半に集まるので毎朝大にぎわい。お年寄りの散歩コースにもなっていて、日課のように毎日集まってはおしゃべりを楽しんでいる。

島を守るための消防団の真剣な訓練。

辺りが暗くなった夜8時。威勢のいい掛け声が聞こえてきた。この日は礼式訓練が行われており、張り詰める緊張感の中に消防団第7中隊の隊長西村さんがいた。宇久は野焼きなどによる山火事もあるため、消防団は欠かすことのできない存在で、島民全員が頼りにしている。

海水の中に湧いた奇跡の水は今も活躍。

地元で「弘法様井戸」と呼ばれる井戸は、その昔弘法大師がつえで砂浜を突いて真水が湧き出たといわれている場所で、今も澄んだ水がこんこんと湧き続けている。井戸のすぐ近くに住む神原さんは、普段から生活用水として使っていて、この日も釣ざおを洗っていた。

「宇久の発展のために頑張ってよ」と笑う。

若い頃は遠洋漁業に出て、アマダイやレンコダイなどを捕って暮らしを立てていたという鉄夫おじいちゃん。取材で宇久に来たことを告げると、漁の話や戦中の暮らしなどいろいろ聞かせてくれた。別れ際「宇久の発展のために頑張ってよ～」とにっこり笑った。

み～んな仲良し！

元気で人懐こい子どもたちは、この日大きなカメラに興味津々！宇久島は小中高一貫教育。島中の学校が合同で遠足や海岸清掃を行っているので、子どもたちは学校や学年が違ってもとても仲良し。下級生は、上級生を名字ではなく名前に「兄ちゃん」「姉ちゃん」を付けて呼び、上級生は面倒見が良い。また先生も校種の垣根を越えて授業をするので、子どもたちは小学校→中学校、中学校→高校に進学しても、顔見知りの先生に会えて安心して授業を受けることができる。